

生物多様性条約第10回締約国会議（CBD／COP10）

ダイナミックな大地に生きる ―急峻な山地から外洋まで―

Living with Dynamic Earth Flows

- From Steep Mountains to the Open Ocean -

開催日時：2010年10月22日（金）10時～13時

場所：生物多様性交流フェア会場内日本政府屋外大型テント

主催：国土交通省中部地方整備局

○開催概要

日本列島の地形・地質・気候の厳しい沿岸・山間の地域で、自然への知恵にもとづき、今日の技術も導入しながら生きている日本人の姿を、防災および生態系保全の観点から中部地方の事例を中心に紹介する。具体的には、木曽川の山地流域における土砂災害伝承や、ホテルなどの生態系保全の取り組み、また、遠州灘沿岸の愛知県表浜海岸における海岸保全（侵食対策）と砂浜におけるアカウミガメの保護活動の取り組み等を紹介する。

また、世界の状況について、これらの観点について国際的知見をもつ外国人専門家からの話題提供者をCOP10参加者からお願いし、討論を行う。

さらに、気候変動への適応の知恵を、これらの方々から得て、国際的な知恵の共有と協力につなげる。

各報告及びパネルディスカッションを行った。

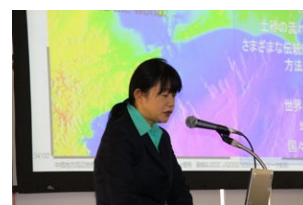
○各報告内容等

九州大学大学院工学研究院環境都市部門准教授

清野聡子 氏

日本列島の沿岸部と山間部の人たちは、地形、地質、気候の厳しい場所に住んでいる。

特に中部地方の山間・沿岸部で暮らす人々の自然に対する知恵や、世界での同様な地域で自然に対して、どのように対処し、災害を乗り越え、対応してきたのか知恵の共有が重要である。



豊橋技術科学大学環境・生命工学系教授

青木伸一 氏

表浜海岸は、水と土砂のダイナミックな動きがあり形成されているが、近年は、海岸侵食等の環境問題が起こっている。その原因は、沿岸開発や侵食対策などさまざまであるが、局所的な対応でなく、広範囲での土砂管理を検討することが必要である。



NP0 法人表浜ネットワーク 代表

田中 雄二 氏

表浜海岸はアカウミガメが産卵に来る砂浜をもった浅瀬の海岸であるが、侵食対策で作った工作物によって、アカウミガメに限ら



ずその他の小動物等、生態系に影響をあたえてしまっている。そのため、再生事業に取り組み、生物生産性が砂浜一帯でうまく回っていくような保全活動を行っている。

愛知県建設部河川課長

伊藤和久 氏

行政の立場から、表浜の保全対策として、海岸保全区域の広範囲な指定（ソフト対策）や、海岸浸食防止ブロックの環境に配慮した配置（ハード対策）など取り組んでいる。今後は、モニタリングを行いながら順応的管理を進めるとともに、関係者と連携し、情報・知見の蓄積を行い、情報を外部へ発信していく。



（財）妻籠を愛する会 理事長

小林俊彦 氏

木曽の檜は、昔は伐採したら必ずその切り株に2本の苗木を植えて山を守っていた。しかし、時代の移り変わり毎に、戦国時代には戦乱後の復興に、明治時代には軍資金に、終戦後にはまた復興のためにと、その都度切られてはだか山になった。その後、成長の早い杉の木を植えたため、手入れする経済力がなく、どんどん荒れ山となった。山は手入れしないと災害をおこし、近年の災害が発生した場所も杉山が多く対策が必要。



中津川市災害対策協議会 事務局

安保辰巳 氏

中津川市では災害の教訓を後世に語り継いでいくことが非常に大切であると考え、中津川の遺跡や観光スポット、災害の遺構、水神様などを巡り、災害と文化とを語り継いでいく仕組み（エクスカッション等）を作っていこうとしている。砂防施設と砂防施設に守られながら、防災に対して先人の知恵を集めてこれを伝えて行くことが重要だと考え活動を行っている



独立行政法人土木研究所 水災害・リスクマネジメント国際センター 専門研究員

アディカリ ヨガナス 氏

ブータンはヒマラヤの斜面に位置し、7500mもの山々が近辺にあり地形的に脆弱である。近年は水文気象学的変化により、氷河が溶けて氷河湖ができ、それが決壊し大規模な土石流が起き下流域に被害を及ぼし問題となっている。政府では、安全のため氷河湖の水抜き工事を行い大規模な災害を未然に防ごうとしている。また、氷河湖の危険度評価、氷河湖拡大メカニズムの検討、決壊洪水発生時の警報システムの立案、ハザードマップの作成等に取り組んでいる。



○総括

清野 氏（コーディネーター）

この地域は海も山も近いため、それぞれに住む多くの人と一緒に考えて、情報が蓄積され、発信されていく。そういった仕組み作りをしていくことで自然への恐れだとか経験の蓄積をして、どういう風にダイナミックな地形と生きていくのかということ

をみんなで考えていけるかを、この COP10 のイベントを通じて考えていければと思う。

